

子どもたちを受け入れるなら

マルコの福音書9章33-37節

はじめに

今日はこの後、「子ども祝福式」があります。一年に一度、教会の子どもたちを覚えて、子どもたちの成長と祝福を祈る時を持ちます。そこで今日の説教は、子どもが登場する聖書箇所を選びました。今日の聖書箇所で、イエス様は一人の子どもを「腕に抱いて」、「**だれでも、このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです**」と言われました。イエス様は弟子たちに、「子どもを受け入れるように」と教えられています。その意味で、弟子たちの土台の上に建てられた私たちの教会もまた、子どもを受け入れる所でなければならないでしょう。

イエス様は今日の聖書箇所で、クリスチャンはどういう人でなければならないか、また教会はどういう所でなければならないかを教えているように思います。

1. イエスの弟子たちが論じ合っていた内容

イエス様と弟子たちは、「カペナウム」という町のある「家」に入られました。「カペナウムの家」と言えば、おそらく弟子のペテロの「家」でしょう。ペテロの家に入られると、イエス様は弟子たちにこう言われました。「**来る途中、何を論じ合っていたのですか**」。イエス様は弟子たちに、「道の途中であなたがたは何をを考え、何を語り合っていたのですか」と聞かれたのです。しかし弟子たちは、黙っていて、誰も答えようとしません。それは、34節にあるように、「**来る途中、だれが一番偉いか論じ合っていたから**」です。弟子たちには、後ろめたい気持ちがあったのでしょう。「だれが一番偉いか」という議論は、イエス様がお嫌いになることだと分かっていたのでしょう。

ここの「一番偉い」という言葉は、ギリシヤ語の「メガス」という言葉が使われていて、非常に広い意味がある言葉です。「大きい」「高い」「広い」「豊か」「優れている」など、様々な意味を持つ言葉です。私たちの日常でも最近は、「メガ」という言葉を聞くようになりました。料理の超大盛を「メガ盛り」と言いますし、大きい何千人、何万人も集う教会を「メガチャーチ」と言ったりします。とにかく非常に大きいこと、非常に優れていることを「メガス」と言うのです。ですから弟子たちは、自分たちの中で誰が一番すぐれているのか、端的に言って、誰が一番すごいのかを考え、論じ合っていたのです。

彼らは、イエス様を信じ、すべてを捨ててイエス様について来た人たちです。それでも、彼らの間では、お互いを比較し、彼らの中で誰が一番優れているか、他の弟子たちよりも自分が一番優れていたかという思いがあったのです。このことは、クリスチャンになっても、

また教会の中でも、こういうことが起こり得るということを表しています。クリスチャンになっても、人と自分を比べるし、人よりも優れていたいと思うのです。教会でも、他の教会と自分の教会を比べるし、他の教会よりも優れていたいと思うのです。それで良いというのではなくて、そこから私たちは自由になり、変えられていかなければなりません。

2. 皆の後になり、皆に仕える者になりなさい

イエス様は、そのような弟子たちに、何と言われるのでしょうか。イエス様は今日の聖書箇所で、二つのことを言われます。一つは 35 節の御言葉です。「**イエスは腰を下ろすと、十二人を呼んで言われた。『だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい』**」。

イエス様は、「腰を下ろして」、十二人の弟子たちに話し始められます。「腰を下ろす」というのは、当時のラビ、律法の教師が弟子たちに重要なことを教える時にする行為です。イエス様は、「皆の先頭に立ちたいなら、皆の後になり、皆に仕える者になりなさい」と言われます。「先頭に立つ」という言葉は、「第一の」「最初の」という意味です。とにかく一番でありたいなら、一番優れていたいなら、一番偉くなりたいたいなら、という意味です。そういう人は、「すべての人の一番後ろになりなさい」「すべての人に仕える人になりなさい」と言われるのです。イエス様は、一番後ろにいる人、みんなに仕える人こそ、先頭に立つべき人だ、一番偉い人だと言われるのです。

これは、この世の価値観とは全く異なるものです。マルコ 10：42 でイエス様は、このように言います。「**あなたがたも知っているとおりに、異邦人の支配者と認められている者たちは、人々に対して横柄にふるまい、偉い人たちは人々の上に権力をふるっています**」。これがこの世の先頭に立つ人、偉い人たちの価値観です。人々に対して横柄にふるまい、人々の上に権力をふるうのが、この世の先頭に立つ人、偉い人たちのあり方です。しかしイエス様は、横柄にふるまうのではなく、皆の後になりなさい。権力をふるうのではなく、皆に仕える者になりなさいと言われるのです。

私たち人間は、なぜ偉くなりたいたい、先頭に立ちたいと願うのでしょうか。それは、注目されたい、尊敬されたい、自分のしたいことを自由にできるからかもしれません。しかし私たちは、必ずしも一番ではなくても良いと思う人も多いと思います。先頭に立たなくても、一番偉くなくても、一番後ろでなければそれで良い。真ん中ぐらいでちょうど良いと思う人も多いと思います。しかしさすがに、一番後ろにはなりたくないのではないのでしょうか。一番小さい、一番劣っている、一番貧しくはなりたくないのではないのでしょうか。なぜ一番後ろ、「皆の後になること」を私たちは嫌うのでしょうか。それは、不安だからでしょう。また惨めに思うからでしょう。安心したいから、惨めになりたくないから、私たちは一番後ろ、「皆の後になること」を嫌うのでしょうか。もし一番後ろ、「皆の後になること」に意味と価値があるなら、私たちは一番後ろになること、「皆の後になること」にも喜びを見出すことができるのではないのでしょうか。

イエス様は、天の御国では、「**後の者が先になり、先の者が後になります**」(マタイ 20:16)。天の御国では、この地上での先と後が逆転と言われるのです。この地上で皆の後になっていた者が、天の御国では先頭に立ち、この地上で先頭に立っていた者が、天の御国では皆の後になるのだと言われるのです。またイエス様は、こうも言われます。「**あなたがた皆の中で一番小さい者が、一番偉いのです**」(ルカ 9:48)。イエス様によれば、一番小さい者が、一番偉いのです。イエス様は、この世での一番後ろにいる人、一番小さい人、一番劣っている人にこそ目を留められ、祝福されるのです。この世の人々が、見下し、惨めに思い、目にも留めないような人を、目に留められるのです。ですからイエス様を信じている私たちは、「皆の後になること」を決して恐れる必要はないのです。そこには、イエス様の目が確かに注がれているからです。

イエス様は、「皆に仕える者になりなさい」とも言われました。「仕える者」とは、「世話をする」「給仕する」「手伝う」という意味です。またこの「仕える者」とは、ギリシヤ語の「ディアコノス」という言葉で、「執事」と訳されます。その意味で、教会の役員である「執事」とは、人々に「仕える者」のことであり、人々の「給仕」をし、人々を「手伝う」役割があることが分かります。イエス様の言葉によれば、皆の「執事」になる人が、先頭に立つ人となるのです。

教会の牧師や長老は、ある意味では、教会において先頭に立たなければなりません。しかしイエス様は、先頭に立つ人は、皆の「執事」になりなさいと言われるのです。その意味で、牧師や長老になる人は、教会の役員である「執事」を経験した人であることが望ましいと私は思います。なぜなら、人々に「仕えること」を学んだ人が、初めて人々の「先頭に立つこと」ができるからです。「仕えること」を学んだことのない牧師や長老は、この世の支配者のように、横柄にふるまい、権力をふるってしまうからです。イエス様が考えるリーダーは、皆の後になることを決して恐れず、皆に喜んで仕える人なのです。

3. 子どもたちの一人を、イエスの名のゆえに受け入れる

イエス様が今日の聖書箇所で言われたもう一つのことを見てみましょう。36-37 節です。「**それから、イエスは一人の子どもの手を取って、彼らの真ん中に立たせ、腕に抱いて彼らに言われた。『だれでも、このような子どもの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしではなく、わたしを遣わした方を受け入れるのです』**」。

まず確認したいことは、イエス様が十二人の弟子たちに重要なことを教えるその場に、「子ども」がいたということです。イエス様は決して、御自身が説教される場から、子どもを排除される方ではありませんでした。むしろ「子どもの手を取って」「真ん中に立たせ」「腕に抱かれる」のです。イエス様の御言葉が語れる場、それは今で言えば「礼拝」です。そうであれば、「礼拝」に子どもがいることも自然なことです。イエス様は、「礼拝」から子どもを排除する方ではありません。むしろ「受け入れるように」と言われるのです。「受け

入れる」とは、「迎え入れる」という意味です。

イエス様は、「だれでも、このような子どもの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです」と言われます。イエス様は、子どもを、イエス様の名のゆえに受け入れるようにと言われます。子どもは、可愛いから受け入れるではありません。また子どもの中には、可哀想な環境で育った子もいます。しかし私たちは、子どもを可哀想だから受け入れるのでもありません。イエス様は、子どもを、そのような感情的に受け入れるのではなく、イエス様の名のゆえに受け入れるようにと言われるのです。

では、イエス様の名のゆえに子どもを受け入れるとは、どういうことでしょうか。イエス様は、マタイ 25：40 でこう言われました。「**まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです**」。イエス様は、「最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです」と言われます。今日の聖書箇所でもイエス様は、「だれでも、このような子どもの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです」と言われます。イエス様は、子どもたちの一人を受け入れることは、わたしを受け入れることだ、最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたことだと言われ、子どもや小さい者と御自身を重ねておられるのです。

その意味で、イエス様の名のゆえに子どもを受け入れるとは、イエス様を受け入れるように、子どもを受け入れるということではないでしょうか。イエス様に接するように、子どもに接するということではないでしょうか。私たちが、また教会が、子どもをどう受け入れているかが、そのまま私たちが、また教会が、イエス様をどう受け入れているかということになるのです。私たちがもし子どもたちを受け入れていなかったら、イエス様を受け入れていないことになるのです。逆に、私たちがもし子どもたちを受け入れているなら、イエス様を受け入れていることになるのです。

おわりに

今日の聖書箇所でもイエス様は、クリスチャンとして大切なこと、また教会として大切なことを教えておられます。一つは、皆の後になることを恐れないこと、二つ目は、皆に仕える者になること、そして三つ目は、子どもたちを、イエス様の名のゆえに受け入れることです。

イエス様の目は、このような者たちにこそ注がれるのです。そして天の御国では、このような者たちこそ、祝福されるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、この世の価値観とは全く違った教えをなさいます。天の御国の価値観を私たちに教えてください。この世に生きる私たちは、この世の価値観と天の御国の価値観の狭間で揺れています。どうか信仰の目を開いて、天の御国の価値観で生きていくことができますように。皆の後になり、皆に仕える者となることができるように。イエス様の名のゆえに子どもたちを受け入れていくことができますように。

この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。